

藤原義江記念館

紅葉館の呼び名でも知られる藤原義江記念館は、関門海峡を見下ろす南向きの丘の緑豊かな場所にある。藤原義江記念館は、男性歌手でありオペラ界のスターであった藤原義江（1898-1976）の名を冠した記念館である。また、この場所は英国商社ホーム・リンガー社の旧社屋跡地でもある。

紅葉館

1890 年、ホーム・リンガー商会は瓜生商会という会社を通じて下関での取引を開始した。1895 年には、ニール・プロディ・リード（1868-1920）というスコットランド人が現地支配人として雇われた。

1901 年までには、下関の海上貿易は活況を呈し、英国領事館が設立され、この地域でのビジネスを目指す進取的な企業への道を切り開いた。1908 年、木造平屋建ての小屋が、ホーム・リンガー商会の英国人従業員の住居として建設された。この最初の社宅は「紅葉館」と名付けられた。後に世界的なオペラ・テノール歌手となる藤原義江が生まれたのも、この紅葉館だったという説もある。

1915 年までに、ホーム・リンガー商会の経営は、創業者の次男であるシドニー・A・リンガー（1891-1967）に引き継がれた。シドニーは、息子のマイケル（1913-1978）とバーニャ（1916-1942）のために、下関に鉄筋コンクリート 3 階建ての家を建てた。木造バンガローの背後に建つこの建物は、当初「臨峽館」と呼ばれていた。1959 年、紅葉館は台風で大きな被害を受けて取り壊され、同じ名前のコンクリート造りの住居が建てられた。新たな紅葉館は 1983 年に記念館として再オープンした。

藤原義江

藤原義江（1898-1976）は、一家の離散と貧しい生まれ育ちから世界的に有名なオペラスターまで上りつめた人物である。名声の絶頂期、藤原の美しいテノールの歌声は、ヨーロッパやアメリカの多くのオペラハウス聴かれた。

ニール・プロディ・リードと琵琶演奏家の坂田キク生（生年不詳）の間に生まれた婚外子である藤原は、東京に住んでいた 1918 年に自身のオペラの才覚に気付いた。1921 年、後に首相となる吉田茂（1878-1967）との偶然の出会いにより、ロンドンの名高いアスタインウェイ・ホールにて演奏する機会を得る。1923 年までに、ニューヨーク・タイムズ紙は藤原を "日本のルドルフ・ヴァレンティノー" と評した。1926 年、藤原は当時世界で最も権威のあったレコード会社であるビクター・レコードとレコーディング契約を結んだ。

第二次世界大戦後、彼は日本最古の歌劇団のひとつである藤原歌劇団を設立、この歌劇団は現在も活動している。1976 年 3 月 22 日、藤原義江は 77 歳で逝去した。

記念館のコレクション

記念館は、オペラスター藤原義江の生涯にまつわる記念品の宝庫である。いかめしく、口髭を生やしたニール・B・リードの肖像画が、着物姿の坂田菊や彼女の美しく保存された琵琶のセピア調の画像と並んで飾られている。日本語で書かれた数え切れないほどの雑誌や新聞の切り抜きには、藤原義江の国内外での活躍の詳細が記されている。

展示スペースとなったりビングルームでは現役のヴィクトローラ VV-X VI タイプ D 蓄音機が藤原の初期のヒット曲を再生する。オリジナルの暖炉、年代物の調度品、豪華なシャンデリア、そして藤原義江が愛用したピアノの存在が、このミュージアムに家庭的な雰囲気を与え、かつての大スターの私生活を垣間見せてくれる。